

明治家 実業列伝⑧

伊藤 清次郎

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野正道



電灯会社の設立

明治二十一（一八八八）年七月一日、仙台の三居沢にあった紡績工場とその裏山の烏崎で電灯が灯りました。仙台で初めての電気の明かりです。

この仙台初の電灯を灯したのは、前回紹介したように普克復が社長であった宮城紡績会社でした。紡績用の水力タービンを利用した発電は、日本最初の水力発電として歴史に名をとどめるものでしたが、発電機はわずかに五キロワットの電気しか生み出せず、工場内で用いる電灯を灯するのが精一杯でした。

その後、街の中にも電灯を灯そうという電灯事業の構想が持ち上がりました。発電所を新設すると経費が相当の額になるということで、発電は宮城紡績会社が行い、電灯会社は配電



明治33年に発行された仙台市街地の中心部・芭蕉の辻の絵。街の中に電柱が立ち、電線が張り巡らされた風景が印象的に描かれている。

を行うという役割分担が定められました。

これによって宮城紡績会社は三十キロワットの発電機を導入し、明治二十七（一九〇四）年一月に社名を宮城水力紡績株式会社と改めました。一方で同年四月に配電、電灯事業を受け持つ仙台電灯株式会社が設立され、七月一日から仙台市内への配電が開始されたのです。

宮城紡績電灯株式会社

電灯事業の開始時、電気料金は一灯あたり月一円五十銭で、電球は一個一円で購入するが、一月三十銭で借りるというものでした。

電球を借りて電灯を灯すと、月に二円弱が必要になりますが、当時の一銭は、ざっと現在の二百円程度に相当しますので、おおよそ四万円程度の経費がかかったこととなります。こうした経費の高さから、仙台電灯の開業時に仙台市内に灯った電灯は三百六十五しかありませんでしたが、供給量は急増し、開業後二年ほどで二千灯に達したのです。

このように仙台の電灯事業は順調にスタートしました。しかし、その母体となった紡績工場は経営不振であったため、紡績の赤字を電灯で補填すべく、明治三十二（一九〇九）年に紡績、発電、配電を統合し、宮城紡績電灯株式会社が設立されました。この頃、供給電灯数は四千に達し、供給域も仙台市外にも及ぶようになりました。需要の増加に対応すべく、三居沢の発電設備を増強するなど、電気事業は右肩上がりの成長を続けたのです。

電狸翁・伊藤清次郎

この時期、宮城紡績電灯で経営の実権をもっていたのが伊藤清次郎という人物です。安政三（一八五六）年に仙台北河原町の商家である小西家に生まれ、伊藤家の養子となった清次郎は、青年の頃から馬車による運送業を手がけ、また日本鉄道会社に多額の出資をするなどして、多くの財をなしたのです。

明治二十二（一八八九）年に市会議員、明治二十五年に県会議員に選出されるなど、地方政治にも関わった伊藤清次郎でしたが、まもなく普克復に乞われて宮城紡績の取締役に就くと、議員に再出馬することなく、電気事業の展開に尽力することになります。

清次郎は工学などを専門的に学んだことはありませんでしたが、機械や電気については独学で知識を習得しました。名前を名乗らずに発電所の見学に訪れた第二高等学校の電気工学の教授に英語交じりの解説をして感心されたり、自家製の変圧器をめぐって電気機械の権威であった中村幸之助博士（東京工業大学初代学長）を論破するなど、専門家に負けない知識と自信をもっていたのです。

電気事業以外にも、仙台市街自動車の顧問や市電の調査委員など、清次郎は仙台のインフラ整備に大きく関与しました。このように、電気事業をはじめとして仙台の近代化を象徴する代表的人物として、清次郎は市民から「電気の頭」「電狸翁」と呼ばれ、親しまれました。清次郎が八十二歳で亡くなったのは昭和十三（一八三三）年十一月十三日。彼が育成した電気事業は、仙台市の市営事業として大きな発展を遂げていきましたが、戦争の足音が高くなるこの時期、電力は国家管理による統制を問近にして大きな転機を迎えていました。

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館／株式会社宮城県教科書供給所
TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183

お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地 TEL.022-225-3074



明治時代以来、発電を続ける三居沢発電所